

陽子線治療に臨む子どもの母親が抱く思い

| | |
|--------|---|
| 著者 | 小澤 典子 |
| 発行年 | 2018 |
| 学位授与大学 | 筑波大学 (University of Tsukuba) |
| 学位授与年度 | 2017 |
| 報告番号 | 12102甲第8727号 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00152690 |

| | | | | | |
|-------------|---------------------|---------|----|-----|--|
| 氏 名 | 小澤 典子 | | | | |
| 学 位 の 種 類 | 博士（看護科学） | | | | |
| 学 位 記 番 号 | 博甲第 8727 号 | | | | |
| 学位授与年月 | 平成 30年 3月 23日 | | | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | | | |
| 審 査 研 究 科 | 人間総合科学研究科 | | | | |
| 学 位 論 文 題 目 | 陽子線治療に臨む子どもの母親が抱く思い | | | | |
| 主 査 | 筑波大学教授 | 博士（医学） | 日高 | 紀久江 | |
| 副 査 | 筑波大学准教授 | 博士（医学） | 福島 | 敬 | |
| 副 査 | 筑波大学助教 | 博士（保健学） | 笹原 | 朋代 | |
| 副 査 | 筑波大学助教 | 博士（看護学） | 杉本 | 敬子 | |

論文の内容の要旨

小澤典子氏の博士学位論文は、陽子線治療に臨む小児がん患児の母親を対象に、治療法の選択から治療に臨むまでに抱く母親の思いの現象とそのプロセスを質的研究により明らかにすることを目的に行われた研究である。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

本研究の目的は、先端技術の一つである陽子線治療を受ける子どもの母親が、陽子線治療を受けることを選択し、陽子線治療に臨むまでにどのような思いを抱いているのか、それらの現象と治療に至るまでの母親の心理的なプロセスについて、インタビュー調査を行い質的帰納的分析により明らかにすることである。

（対象と方法）

著者は本邦において陽性線治療の実施数の多い1病院で陽子線治療を実施した子どもの母親13名を対象にインタビューを行い、子どもが陽子線治療を受けることについてどのような思いを抱いているのか、またその思いが治療の選択から治療の実施までの期間にどのように変化するのか、母親の語りからその心理的なプロセスを示すとともに、そこに生じている現象を明らかにしている。子どもの陽子線治療が4分の3以上終了した後に、著者は母親に対してインタビューガイドを用いた半構造化面接を行い、インタビューで得られた言語データから逐語録を作成し、Grounded Theory Approach法を用いて質的帰納的な分析を行っている。データ分析には、小児看護の専門家や小児の陽子線治療に関する看護の経験者等とデータを読み込み、カテゴリーの作成ならびにカテゴリー間の関連性などについて議論を繰り返し行い、母親の語った内容についてはメンバーチェックングを実施することでデータの信頼性を確保している。

（結果）

著者は、母親の陽子線治療に臨むまでに抱く思いには、【将来への不安の押し寄せ】という統合された現象が生じていると述べている。これは、本研究の子どもが多くが化学療法後に放射線療法が推奨さ

れていたが、放射線療法には成長障害や二次がんなどの晩期合併症が起こりやすいことから、母親は子どもの救命を望む一方で治療後の子どもの QOL を考慮した生活も確保したいという、《救命の先に将来の生活を思い見る》という状況を起点にした現象であると示唆している。

母親は陽子線治療の存在やその効果に関する情報を得ることにより、《唯一無二の治療であるという陽子線への期待》を持つが、陽子線治療を行える病院は本邦では数か所しかない現状から、治療を受けるためには転院が必要であり、父親や子どもの兄弟姉妹などのことを考えながらも《転院による困難さを乗り越えてでも子どもを支える覚悟》を持っている。しかし、陽子線治療でも晩期合併症が起ることを知り、陽子線への期待が高いほど《将来への不安の押し寄せ》という、母親の不安が増大すると著者は述べている。しかし、陽子線治療の時期が近づくにつれ、晩期合併症や再発リスク等の不確かな状況ながらも母親はそれを受け入れることにより陽子線治療に《前向きな気持ちでの取り組み》が可能になるという帰結となり、あるいは治療に気持ちを集中させることで《気持ちの中心を不安から治療に切り替える》という帰結を向かえるというプロセスを経ていることを明らかにしている。その一方で、陽子線治療の存在や治療を受けるまでに時間を要する場合には、《唯一無二の治療であるという陽子線への期待》を持ちながらも、母親は《照射開始までに病状が進行する不安》もあり、陽子線治療を選んだことに対して《ぎりぎりまで悩む治療選択》という帰結に至ったという結果を導いている。

（考察）

著者は、【将来への不安の押し寄せ】という統合された現象には、陽子線治療の選択から治療に臨むまでの経過のなかで、陽子線に対する期待を持つとともに、治療による晩期合併症などが及ぼす子どもの将来の生活の質に対する不安な思いを持つというアンビバレントな思いが生じていることを示唆しており、それは陽子線治療を受ける子どもの母親の特徴であると述べている。

また、陽子線治療についての適切な情報が医療職から得られないことが、陽子線治療の選択や晩期合併症の恐れなどに影響していると著者は述べ、小児がん医療に携わる医療職の教育の必要性についても言及している。さらに著者は、陽子線治療は居住している地域を離れ、陽子線の設備の有する病院に転院して治療を受けることにより、母親が子どもを支えることへの一層強い覚悟を持つことや家族の一体感を高めるなどの強みにつながる一方で、治療に関する情報を得る機会や転院先の病院での信頼関係の構築、経済的な支援などのソーシャルサポートの必要性について言及している。

【将来への不安の押し寄せ】という母親が増大する不安に折り合いをつけて治療に臨んでいくというプロセスには、子どもの将来を考慮した治療法の選択について母親がいま一度振り返り、陽子線治療に意味づけを行い治療に臨むという行為が含まれており、このことは陽子線を受ける子どもの母親に対する心理的な支援の一助になると著者は述べている。

審査の結果の要旨

（批評）

本研究は、陽子線治療を受ける子どもの母親のインタビューにより、陽子線治療の選択から治療に臨むまでに抱く思いの現象と心理的な変化のプロセスを導き出したものである。先端技術による治療を受ける子どもの母親が、陽子線治療に強い期待を持ちながらも晩期合併症などへの不確かな不安を常に抱きながら治療を受け止め治療に臨むという母親の思いの現象と、揺れ動く思いのプロセスを明らかにした点において、小児看護の家族支援において重要な知見を示している。

平成 30 年 1 月 24 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。